

―埼玉・福井親善大使企画―  
オハイオ州・フィンドレー・インタビュ

一、はじめに

本レポートは、埼玉県、福井県の親善大使によるオハイオ州・フィンドレーに関するインタビュ結果を紹介するものである。フィンドレー市長、フィンドレー大学長、同大学前学長に対しインタビュを行い、留学の意義や三方の生い立ちや様々な経験、仕事等について伺った。主な読者を埼玉県、福井県の高校生と想定し、両県の留学奨学金制度、また留学そのものへの興味・関心の向上を目的とする。

インタビュアー:

曾根友也

埼玉県出身。埼玉県・オハイオ州スカラシップ(総合系)平成二十五年度奨学生。慶應義塾大学法学部政治学科三年。

河上直子

福井県出身。

フィンドレー大学・福井県平成二十五年度奨学生。大阪大学外国語学部外国語学科三年。

二、インタビュ

キャサリン・ロー・フェル

フィンドレー大学学長



アメリカ南部のアーカンソー州出身。

キング牧師を筆頭とした公民権運動の真只中に生まれた。二十四年間勤めたルイジアナ州のセンテナリー大学で准教授と副学長を経験。後、オハイオ州フィンドレー大学で現在学長として四年目。同大学史上初の女性学長。「二〇一一年 Ohio Diversity and Leadership Conference においてオハイオで最も影響力のある女性」として選出される。テキサスA & M 大学英語博士号取得。

1  
まず、私たちのように若いうちから留学することについてどうお考えですか。

留学は教育にとって不可欠なものだと思います。海外で勉強した学生たちは、自身が国際社会の一員であると感じるとともに、その経験が人生を変えたと言ってくれます。

2  
現在二十六カ国から三百名を超す留学生がフィンドレー大学で学んでいます。フィンドレーの留学生受け入れ状況についてどうお考えですか。

3  
す。これは本当に重要な役割だと感じます。さらには教職員も学生の留学を後押しするよう取り組んでいます。  
\*HELPプログラム:  
留学生を対象とした英語集中プログラム

3  
フィンドレー大学の異文化交流プログラムはこの大学の強みの一つだと思います。留学生は英語を学んだり異文化に触れたりすることができません。では、アメリカ人学生にとって留学生と交流することのメリットは何だとお考えですか。

私たちはこれまで多くの留学生を受け入れてきました。私はその取り組みの歴史を誇りに思っています。これからもさらに留学生の受け入れを強化していきたいと考えます。私たちは\*HELPプログラムを実施し、英語を学びたい留学生の支援をしてきましたし、これからも続けていきます。また、アメリカ人学生が留学生とより親密な関係を気づくこと、さらにはアメリカを出て海外で勉強することを可能にするため、努力していま

留学生との交流により、アメリカ人学生も自らとは異なる人々に対しより心を開くことができるようになりますし、それはフィンドレーの学生含む教養人として本当に重要なことだと考えます。また、アメリカ人学生も留学生と同じかそれ以上に多くのことを学びます。こうした交流により、ときに国籍や人種の違いがあるからこそ私たちは面白いと感じ、しかし同時に、同じ人間であるという共通性が「違い」を超えた友達として私た

ちを結び付けてくれるのです。

これまで、海外で学ぶことやフインドレー大学の留学生受け入れ状況についてお聞きしました。若いうちに留学することや異文化交流を経験することの意義を私たちは身を以て感じています。このような素晴らしい機会を学生のうちに頂けて本当に感謝しております。

4

さて、今度は視点を変えて、フェル学長の若い頃についてお聞きしたいと思います。フェル学長がアーカンソーでお生まれになった頃は、キング牧師を筆頭とした公民権運動が盛んでした。ご自身の家庭環境や学生時代について教えて下さい。

家庭によっては黒人、白人両コミュニティで差別意識がありました。しかし、私の家庭では黒人へのそうした意識は全くありませんでした。黒人、白人、それぞれの学校のアイデンティティーや誇りが互いに入り混じる状態でしたが、彼らの亀裂がなくなるまでには長い時間が必要でした。私が所属していた大学の合唱クラブで

は黒人の学生も歓迎されましたが、いくつかの白人専用の教会では私は歌うことができませんでした。しかし年月を経て、多くの白人専用教会も私たちのクラブを歓迎するようになりました。現在でもそうであることを願っています。

5

このインタビューは県の高校生を主な対象としております。フェル学長の高校生活について詳しく教えて下さい。

私の高校は非常に小規模で、設備もそれほど充実したものではありませんでしたが、素晴らしい先生方に恵まれました。そのおかげで大学入試にも十分に備えることができました。私は高校生のころも、大学入学後もよく勉強しましたし、バスケットボールやチャアリーディングにも力を入れ、非常に活発な学生生活を送っていました。

6

キング牧師の「私には夢がある」という有名な演説から五十年が経ちましたが、未だにアフリカ系アメリカ人に対する差別は残っています。この問

題について当時、印象的だったことを教えて下さい。また差別問題の現状についてどうお考えですか。

私には高校の頃、よく一緒に遊ぶ黒人の友達がたくさんおり、それは非常によい思い出でありよい経験でもあります。世界中に未だ人種差別があることは確かです。人種問題に関して私たちは時間をかけて進歩を遂げてきましたが、やはりまだまだしなければならぬことはたくさんあります。これは何もアフリカ系アメリカ人についてだけではありません。すべての人種の関係を考えなければなりません。よくアメリカが「人種のつぼ」と言われるようにアメリカにはすべての人種がいます。差別問題は国家間ではなく個人間の問題として捉えられるべきです。だからこそ個人同士がいかに厚い友情を築けるかが重要なのです。私は人種間の融和を妨げる本当の敵は教育の欠如にあると思います。ですから、フインドレー大学は国籍や宗教、またラテン系、黒人、アジア系、人種に関わらずより多くのアメリカ市民を歓迎しています。

7

英語専攻で博士号を取得された後、フェル学長は教育の道に進まれ、センテナリー大学で二十四年間教育に携わっていらつしやいました。なぜ教育の道に進もうと考えたのですか。

教育の道に進むことになったきっかけは、大学一年生の一学期に履修したスピーチの授業です。緊張もしましたが、なにより話すことが非常に面白かったため、教育の道に進もうと思いました。大学においても出会った先生方はすばらしい方ばかりで、私にとつて適したとても落ち着ける環境でした。

8

センテナリー大学で\*Interdisciplinary 専攻の設立に貢献されたと聞いていますが、これはどのようなことを学ぶ専攻のですか。

\* Interdisciplinary:

「複数の学問領域に関わる研究をすること。学際的。」(スーパード辞林 3.0 「インターディシプリナリー」)

私が設立に携わった Interdisciplinary 専攻はコミュニケーションの領域の一部です。英語専攻というよりもっと

幅広い専攻です。映画や芸術、ビジネス・アート、グラフィック・デザイン等様々で、大学の中でも重要な学部であるべきものです。その専攻は現在でもセンチナリー大学で非常に重要な位置付けとなっています。

9  
Interdisciplinary 専攻を設立する際、何か困難はありましたか。

もちろん大変でした。私たちはその専攻の設立のために大学や学部の関係者を説得する必要がありました。大学のような学問的なコミュニティでは大きな変革を嫌うのです。しかし、その設立によって学生に素晴らしい教育を与えることが可能になるし、さらにはその利益が大学にも返ってくると思えました。また学生数も増えるだろうと思っただけです。そして批判をされることもありましたが、最後には現実のものとなりました。

10  
大学への学問的貢献に加え、資金運用部長、開発部長としても活躍されたと伺っています。資金集めのためなどのようなことをされたのですか。

また、成功の秘訣は何でしたか。

資金調達部門に自ら希望して関わったことはありませんでした。しかしあるとき、資金調達企画の手伝いを頼まれたことがあり、それに関わるうちにやりがいや面白さに気付いてきました。資金調達の成功の秘訣は同じ信念を共有する人々を見つけ、彼らと強力な関係を築き、そしてそうした人々を支援の対象となる学生と結びつけることです。こうしたことに私は強い魅力を感じました。



約二十五年に渡りセンチナリー大学でキャリアを積んだ後、フィンドレー

大学の学長に就任することとなりました。前大学はアメリカ南部のルイジアナ州にあるので、フィンドレーとは違った雰囲気があったのではないかと思います。

11  
では、フィンドレー大学の第一印象を教えてください。

新しいことに積極的に取り組む、革新的でまさに成長していく大学だと感じました。またフィンドレー大学が様々な宗教を尊重し、学生の知的好奇心に対して真剣に応える姿勢にも感銘を受けました。皆が同じ宗教を信じる必要はありませんが、それぞれの信仰を尊重することが大切です。これはフィンドレー大学の強みであり、私がこれからも守りたいことです。

12  
フィンドレー大学の学長に就任したとき、学長としての目標は何でしたか。

フィンドレー大学を博愛の精神に満ちた国際社会と結びつけ、より魅力的で競争力のある大学にすることです。

す。今もこの大学がどの分野においても秀でた存在であること、社会に役立つ教育を与えられることを目標とし、達成に向けて努力しています。

13  
就任以来、学長としてフィンドレー大学のために日々努力をされていることと思います。しかし、私たち学生には学長の普段の仕事はなかなか想像しづらいです。毎日どのような活動をされているのか教えてください。

毎日が楽しいです。たくさんメールに対応したり、記事を書いたり事務的な仕事もしますが、学長として過ごす時間の半分は、地域のリーダーや大学の卒業生、国内外の友人とのさらなる関係づくりに充てています。フィンドレー大学の評価向上に努め、こうしたことが、より多くの優秀な学生や大学への支援の獲得につながると考えています。

14  
学長に就任されて今年で四年目になります。今まで何か困難はありましたか。

一番大きな困難と言えば時間の使い方でしょうか。限られた時間をどう使うのが最善か。複数の可能な選択肢の中からどれを選ぶか決めるのは難しいことです。これが唯一の困難と言えるかもしれませんが、この大学で学長を務めていて何かに失望や後悔を感じたことは一度もありません。大学の未来も非常に明るいものだと思います。

15 困難を克服する秘訣は何だと思えますか。

それは自分自身であり続けること、そして信念を曲げず、大学にとつての理想の姿をイメージし続けることです。さらに、いかなるリーダーも部下を信頼できなければならぬと思います。私は彼らに厚い信頼を置いていますし、彼らもそれに応えてくれていると感じます。

16 では、「ここからは違った視点からお話を伺いたいと思います。学長「二〇一一年に「オハイオで最も影響力のある女性」として表彰されています。この

受賞はフインドレー大学初の女性学長としての功績によるものだと思います。大学初の女性学長であるということについてどうお考えですか。

特に女性だからという点で変わったことはありません。私は、良いリーダーである限りは男性であつても女性であつても特に問題はないと思つています。ただ学長が女性である点是人々の関心を引くことだという自覚はありますが、差支えなく思うように仕事ができています。

17 特に日本では、女性の社会進出の低さが問題となっています。アメリカも同じ問題を抱えていると思いますが、この問題についてどうお考えですか。

意思決定の際には、男女問わない意見が必要です。そのため、女性が育児休暇を申し出ることはいつこうに構いません。たとえそれが男性であっても、私は喜んで受け入れます。その貴重な人生経験は人間性を豊かにしてくれますし、私はそのような方々と共に働きたいです。ですから

家庭を持つことは仕事上何の妨げにもなりません。

18 大学と地域は密接に結びついていると思います。フインドレー大学は地域にとつてどのような存在であるべきだと考えますか。

フインドレー大学は地域に優れた人材を輩出し、地域や企業を引っ張っていかなければなりません。互いに協力して問題を解決する存在であるべきだと考えます。

19 最後に、今回のインタビューの主な対象である日本の高校生含め、未来の世代に向けてメッセージをお願いします。

今いる場所から出て広い世界を見てみて下さい。もし私たちに皆さんの世界を広げる手助けができるなら、私たちフインドレー大学は皆さんを大いに歓迎します。





アメリカ南部テネシー州出身。ウエストポイント(アメリカ合衆国陸軍士官学校)を卒業後、進駐軍の将校として福井県に滞在。退役後は、七年間フィンドレー大学長を務める傍ら二〇〇五年に福井県との奨学生制度を創設。

1  
まず、フリード前学長の若者時代についてお聞きしたいと思います。今回のインタビューの主な対象が県内の高校生ですので、高校生活について教えて下さい。

私は農場で育ったので、私の高校生活は他の人とは少し変わったものでした。毎朝四時に起きて搾乳や家畜の世話をしました。一方で、私の家では食事のときにアメリカで何が起きているか、何が問題か等について話すようなこともありました。特に母は文学に深い理解があり、またラテン語も堪能でした。もし子どもが何かを巡って争っていたら、私の母ならシェイクスピアからの引用を使って諭すでしょう。私の祖母もまた単なる農場生活とは違う側面を与えてくれたように思います。例えば、彼女は私に聖歌を覚えさせようとしていました。一曲覚えると1ペニー(1円)もらえたのでした。ある日、百五十曲中の十三曲にミスをしてしまったとき(つまり九十二%は正解)、祖母から「あなたの人生は九十二%でいいの?」と言われたこともありました。こうした生活でしたので、農場での生活、仕事と、それ

とは異なる要素が入り混じった環境だったと思います。

2  
フリード前学長は、ウエストポイントに入学され、第二次世界大戦終戦の九か月後までおられました。いつウエストポイントに入学しようと決意されましたか。

3  
当時は高校時代が大体の人が入隊する時期でした。私は陸軍学校と海軍学校の両方に申請しましたが、おそらく制服が陸軍の方がかっこよかったのでそちらを選びました。十六歳のときにウエストポイントへの進学を決意しました。私の出生証明書に何か間違いがあったかどうか定かではありませんが、おそらくそれに表示されている年齢よりも実際は若かったと思います。私は農家出身で家のベッドの上で生まれました。担当した医者が出生証明書の記載を誤ったのだと思います。これによって実際はおそらく正規の年齢に満たなかったにも関わらず、ウエストポイントに進学することができました。

なぜ軍隊に入ろうと思ったのですか。

直感的なものだったと思います。士官候補生というのは全米から集まってくるもので、高い評価を得ていた地位でした。私自身、人生の中で軍隊に入らなければとは考えていませんでしたが、ある種私のしたいことだったのだと思います。

4  
ウエストポイントでは主に何を学び、どんな学生生活でしたか。

私は有意義な時間を過ごせたと思っています。本来肯定的に捉えられるべきものではないですし、むしろそこで過ごした苦しい時間のことを伝えたいがる人も多いでしょう。しかし私はそうは思いません。そこにははつきりとした上下関係があり、私はそれを気に入っていました。学問としては、芸術や文学を学びそれらは科学志向の強いもので、工学専攻に近かったと思います。

5  
今度は、ウエストポイント卒業後のご

自身について伺います。卒業後23年間に渡り米軍に献身されました。日本の福井県はじめ、数か国に滞在したことがあると聞いています。卒業直後日本に来られたそうですが、訪日がどのように決定され、日本で何をされたのか、また目的等を教えてください。

まず私は軍隊内での役割を決めなければならず、歩兵になることを選びました。そして、ヨーロッパに派遣される者もいましたが、私は日本に行く機会を得ました。滋賀県の大津にある組織への配属が決まり、そこに住むことになりました。これはくじ引きのように決まるのではなく、在学中の成績で決まりました。また、アメリカが西洋文化の影響を強く受けているのに対し、日本には全く異なる文化があり、それに触れる良い機会だとも考えていました。さらに、日本は当時急速に国力を高めようとしていました。すべての工場が破壊されたにも関わらず、鉄鋼会社が非常に高い効率で生産をしていた事実にはとても感心しました。日本人はアメリカ人のように大きな体格ではありませんが、今まで導入されたことのない方

法で生産していたのです。そして第二次大戦の数年後、日本は事実上国家として破綻しましたが、1年ごとに少しずつ進歩するどころか20年分急速に成長を遂げたのです。

日本では、各市町村を訪れ、その長や警察署長に日々何が起きているか尋ねて回りました。私は特に大津や福井で大半を過ごし、人口五百人ほどの小さな村をたくさん訪問しました。十分な食料があるかといった非常に現実的な質問もしました。幸い天候に恵まれ、農作物の生産基盤も整っていました。家畜が不足していません。すべて食べ尽くしてしまっていたからです。ですからテネシーに住む私の母から卵を送ってもらい、私はそれを孵化させ養鶏したのです。当時出会った日本人は、抱えている問題については何も文句を言わず、どうすれば彼らの、そして彼らの子どもたちの生活を改善できるかだけを考えていました。極貧の時代でしたが、私はそうした日本人の姿に強い感銘を受けました。

6

日本滞在についてさらに質問させて

ください。フリード前学長が日本におられたときの年齢は、今の私たち(二十一歳)の年齢と全く同じです。私たちには前学長がそこでどんなことを感じ、考えていたのか、なかなか想像が付きません。日々考えていたことを教えてください。

主に考えていたことは、私たちが人々を救うために何ができるかということです。しかし、この考え方は、当時日本にいた米兵皆が抱いていたものではありません。中には、もしロシアが侵攻してきたらどう対処するかということをもっと考えている人々もいました。米軍はその場合に備える必要があったのです。マッカーサー元帥に導かれたアメリカの一般的な考えは、出来るだけ早い日本の再建を手助けするということだったと思います。

7

日本滞在を通じて最も印象深い出来事は何でしたか。

壊滅状態にあった日本が急速に発展を遂げたことです。日本人の賢明さ、素晴らしいアイデアによって急速に成

長しました。人々は難題の解決のために毎日遅くまで働きました。日本は天然資源が限られていましたし、山が多く、平らな土地があまりありません。そうした中でも資源を最大限に活かしていました。また家畜もほとんど失った状態で、人口に見合う食料を供給する必要もありました。日本人が行った賢い策の一つは、家畜の牛を食料としてではなく、農作業などに活用したことです。こうした人々の高い能力、様々な工夫や努力によつて、日本は窮地から脱したので

8

フリード前学長が日本におられたときから六十五年以上が経ちました。今振り返ってみると、日本での経験はこれまでの人生にどのような影響を与えましたか。

日本滞在によつて、人間はときに何かを迫られてやる方が、そうでないときよりも良い成果をあげられるという考えを得られたと思います。例えば、当時の日本人は戦争によつてどん底の状態にありました。人生においてそうした状況に直面すること

は多々あります。しかし私たちはそれをチャンスとは捉えず、活かそうとしません。たとえ完全には克服できなかつたり、改善できなかつたりしても、ある程度得たかつたものが得られれば、さらなる向上は目指さず、やめてしまうのです。何年も後のことですが、私がカンザス大学で日本人と困難な課題に取り組んでいたとき、彼はいつも桁外れに素晴らしい提案、アイデアをくれたことをよく覚えています。



フリード前学長は、軍人として長いキャリアを積んだ後、マウントユニオン大学で学部長に就任されました。

9  
なぜ教育の道に進もうと考えたのですか。

妻の影響が大きかったのだと思います。様々な国に駐在している間、残りの軍人生活について考えていました。私も妻も教育は公共サービスであり、それに重要な価値を見出していたので、教育の道に進むことを決めました。

10  
フィンドレー大学は教育におけるキャリアの中で最後の機関となりましたが、学長としての目標はどんなものだったか。

特に明確な目標を定めていたわけではありませんが、全ての人と家族のように共に仕事をしました。大学の運営において、教職員に方向性を伝える際、言葉で伝えることなく、彼らをやる気にさせることが重要です。本当に必要なのは、そのチームの皆が

共通の必要性を持つ課題に取り組むことです。教職員の立場を尊重し、適切な距離を取りつつも彼らを助けることが重要です。

11  
現在二十六カ国から三百名を超える留学生がフィンドレー大学で学んでいます。フィンドレー大学は豊かなダイバーシティーに恵まれ、フリード前学長は奨学生制度の設立にも携わりました。では、異文化理解についてどうお考えですか。

人々はもつと異文化理解に努めるべきだと思います。私たちの視野を広げるだけでなく、歴史的な視点から物事を見ることができるようになります。また留学を経験した学生が母国に帰る際には、来たときと異なったアメリカに対する見解を持っていると思うのです。ある国について知るためには、その国で暮らすことに取って代わるものはないと考えます。私は妻と様々な国での生活を経験しましたが、例えば外交官としてイランに滞在していた際、妻はなんとヘルシャ語を学んだのです。またドイツでは、他の外交官の方々より十歳ほど若

く、給料も毎月百二十五ドルとあまり高くありませんでしたが、私もそこでの生活を楽しまました。さらに、チエスロバキアの交響楽団の演奏会を手伝ったり、ドイツの交響楽団の再生にも手を貸したりして、職にあぶれた人のために雇用を生み出しました。

12  
留学生として私たちは日々英語を学び、異文化に触れ、多くのことを学んでいます。ではアメリカ人学生にとって留学生と交流することのメリットは何だとお考えですか。

アメリカ人学生にとつても、異文化交流の重要性は以前よりはるかに増してきています。なぜなら、私たちは今、国際化が進む社会に生きているからです。育った環境が考えれば考え方も異なってきました。しかし根本的なところでは、人々は皆人間として多くの部分を共有しています。現在、フィンドレー大学の留学生数は増えてきていますし、フィンドレー地域に関しても同じことが言えます。

13

「引退」というものはないのだと以前おっしゃっていたように、フリード前学長は交響楽団や病院の理事など、依然フィンドレー地域の活動に携わっていらつやいます。それでは、コミュニティーにとつてのフィンドレー大学はどうあるべきだとお考えですか。

フィンドレー大学は、人文科学や自然科学などにおける教育の充実を図り、また学生の雇用支援をすること、コミュニティの発展に貢献すべきです。私たちは、特に日本企業がフィンドレーに事業展開するための手助けをしてきましたし、そのためにあらゆる困難も乗り越えてきました。

14

最後に、今回のインタビューの主な対象である日本の高校生を含め、未来の世代に向けてメッセージをお願いします。

高校生の段階で異文化交流を経験することは非常に重要だと考えますし、これからもそうした交流は広がっていくと思います。留学を経験するような学生はすでにリーダーシップをとれるような、また今後人々を引

つ張っていけるような存在だと思いません。そうした多くの優秀な学生を私たちは必要としています。実際に、以前フィンドレー大学に留学した学生は、母国に戻ってからあらゆる分野で活躍しています。加えて、現在、フィンドレー大学はアメリカ人学生の日本留学も促進しています。



リディア・ミハリック

フィンドレー市長



アメリカ中西部のインディアナ州出身。二〇一二年よりフィンドレー市初の女性市長。二児の母でもある。過去二度来日。洪水対策と雇用創出に特に熱心に取り組んでいる。フィンドレー大学政治科学士取得。

1  
ご自身の家庭環境や学生時代について教えていただけますか。

私はインディアナ州のフィンドレーよりも小さな町の農家に生まれ、周りの友人と何ら変わりない幼少期を過ごしました。高校生の頃、私は勉強に非常に熱心でしたが、スポーツにも取り組んでいました。フィンドレー大学では、バスケットボールのおかげで奨学金ももらっていました。

2

大学では政治科学部に所属されましたが、なぜ政治に興味を持ったのですか。

私は数学や理科が大好きでしたが、それ以上に中学生の頃から政治に興味がありました。そのころから、アメリカや世界で起こった出来事を書き留めていて、それらのことに非常に心があつたのを覚えています。そのため大学でも政治を学びたいと思ったのです。さらに大学一年生のときの政治学の授業で、大統領選挙を自分たちで真似たことがあつたのですが、大統領を選挙する\*選挙人団投票の



過程が本当に面白かったのです。私は幼いながらも、政治を通じた人々の交流を観察することや公共の福祉を追求することに興味がありました。さらに、宗教や教育など過去の経験によつて変わる政治への考え方、意思決定を知ることがとても面白かったのです。そしてそれらは今もなお変わりません。

\*選挙人団投票…

アメリカ大統領選挙では国民(一般有権者)は州ごとに選挙人団(公職の候補者を選出することのできる選挙人の団体)を選び、その選挙人団が大統領を選ぶ。(ブリタニカ国際大百科事典)

3

今私たちは、フィンドレー大学で学部生として授業の他にも多くのことを学んでいます。ミハリック市長が大学の頃は、政治系のクラブやバスケットボールクラブにも所属されていたとお聞きしています。文武両道は大変だったのではないかと思います。大学生活はどんなものでしたか。

私はいろいろな活動に関わっています

たが大変ではありませんでした。バスケットボールももちろん大学生活の重要な点でしたが、大学は学問を追究する場だと考えていました。大切なのは両者のバランスを上手にとることです。大学生活で身につけた物事のバランスをうまくとる能力は今の仕事や私生活にも生かされています。

4

大学在学中、最も思い出深いことは何ですか。

大学生活で築いたクラスメイトや先方との人間関係です。入学当初、フィンドレー大学は私にとって単に居心地のよい場所でした。しかし卒業するときに、この大学が非常に実り多い場所であったことに気づいたのです。大学で人々との交流や学問を通じて素晴らしい経験をえました。このような素晴らしい思い出が、また素晴らしい人々に会うことができました。フィンドレーが特別な場所だからです。フィンドレーの人々は思いやりに溢れていて寛大で友好的です。

では、次に留学とダイバーシティについてお聞きしたいと思います。

5

現在二十六カ国から三百名を超える留学生がフィンドレー大学で学んでいます。私たちも日々様々な異文化交流をする中でお互いに多くのことを学んでいます。ミハリック市長が学生の頃にもこういった異文化交流の経験はありましたか。

大学入学以前はそうした経験はほとんどありませんでしたが、大学在学中は様々な異文化交流を経験しました。それは私にとって単に知らない世界であっただけで、全く怖気づくことはありませんでした。異文化交流に価値を見出さない人もいますが、私は、それを通じて多くのことを知ることができると思います。そしてその経験が、新しいものや人に会うのが好きで先入観を抱かない今の私を形作っているのだと思います。高校生の頃、私の姉がよく世界は広大で外国には経験したこともないようなことがたくさんあるのだと言っていました。どんなビジネスや団体も多種多様な考え方が必要であり、フィンドレー大学にはその基盤があつたように思います。

6

私たちのように、若いうちに留学することにどうお考えですか。

若いうちに留学をするのは素晴らしいことだと思います。様々な考え方や異文化に触れて多様な価値観を知ること、居心地の良い環境だけで過ごした人よりもはるかに広い視野を持った優れた人になることができると思います。

私の子どもたちにもぜひ留学を勧めたいと思っています。日本を訪れた際、二人は幼いながらも日本の文化、歴史あらゆるものに興味を抱き、まるでスポンジのように何事も吸収し、学んでいました。

7

また、フィンドレー市民のほとんどは白人ですが、ヒスパニックやアジア系などの人々も暮らしています。ミハリック市長はフィンドレー市のダイバーシティについてどうお考えですか。

さらなる多様化を望んでいますし、多様化しつつあると思います。多種多様な人々が同じ街で暮らし様々な

考え方を知れば、金銭的ではなく人間的に豊かな人になることができま  
す。 FINDレー市の企業が国際化に  
取り組んでいるのもそのためです。こ  
こには FINDレー大学がありますし、  
FINDレー大学は目新しい取り組み  
を行っています。若い人を FINDレ  
ーにひきつけることができればさら  
なる多様化が見込めるでしょう。



では、違った視点から質問させて下さ  
い。女性市長としての仕事について伺  
います。ご存じのとおり、特に日本で  
は女性の社会進出の低さが問題とな  
っています。アメリカも同じ問題を抱

えていると思います。こうした現状の  
なかで、二〇一二年に FINDレー市  
初の女性市長になりました。  
市長に当選された直前には、女性だ  
けを対象とした ジョアン・デイビッドソ  
ン・リーダーシップ研究所で学ばれて  
います。

8  
なぜこうした機関で学ぼうと決めた  
のですか。また、主にどんなことを勉  
強されましたか。

ジョアン・デイビッドソン・リーダーシ  
ップ研究所は、有能な女性リーダ  
ーを育成し、政治決定の場により多く  
の女性を参加させることを主な目的  
とした機関です。また州や地域レベル  
で社会に貢献できる女性を増やすこ  
とも重要視されます。コミュニティー  
にとつてダイバーシティーを持つこと  
は重要です。女性の視点も加わるこ  
とで豊かな対話や交流が生まれ、も  
のごとがよりうまく進むと思います。  
だからこそ女性の政治参加や重職へ  
の登用が求められるのです。私はこの  
機関で自信を持つことができるよう  
になりましたし、インタビューやプレ  
ゼンテーション能力の向上、地方・州

関係への理解に役立ったと思います。

最近では改善されてきたように思いま  
すが、日本にも同じような問題があ  
ると思います。男性がお金を稼ぎ、  
女性はそれを支える。しかしこれが  
正しいとは思いません。女性も男性  
と同じように仕事をし、金銭面でも  
家庭を支えることができます。私は  
仕事をする中で、多くの会議に出席  
しますが、大抵その場唯一の女性で  
す。だからと言って特別なことはあり  
ません。「ただやるだけ」です。多くの  
女性に必要なのは強い信念です。本  
当に成し遂げたいことがあるならた  
だそれを掴みに行けば良いのです。  
社会の目、風潮など気にせず挑戦し、  
それを達成するだけです。そしてそ  
れを達成できたときは最高でしょ  
う。

9  
なぜ市長選への出馬を決めたのです  
か。

市長に就任する前は地域経済開発  
部で十年間ほど働いていました。仕事  
の内容上私は財政に携わることが多  
かったですが、私はそのとき、その部

のリーダーシップの欠如に悩まされ  
ていました。当時私は弱冠三十一歳  
でしたが、既に十分な知識と経験を  
積み、どのように市政が動いているか  
理解していました。そして私ならフイ  
ンドレー市に貢献できると思ったので  
す。加えて、私は市の未来を不安に  
思っていました。強いリーダーシップ  
を欠き、はつきりとした道筋がないま  
まではより良い街を築くことはでき  
ません。このリーダーシップの問題を  
解決するため、自らの出馬を決めた  
のです。実際に最近二年間でフイ  
ンドレー市は躍進を遂げました。今まで  
市長としての役割を十分に果たして  
こられたと感じています。

10  
FINDレー市初の女性市長であるこ  
とについてどうお考えですか。何か特  
別な想いはありますか。

市長のような重要な役職には重い責  
任が付きものですが、私は自分が初の  
女性市長であることを嬉しく思いま  
すし、その仕事に誇りを持っています。  
ただ、他の男性職員と自らを区別す  
るようなことはありません。私にとつ  
て、例えば小学校を訪問して、子ど

もたちから「市長さんって女の人の人なの!?!」、「じゃあうちのお母さんも市長さんになれるのかも!」といったことを聞けることほどうれしいことはありません。

11

ミハリック市長は市長でありながら、二児の母でもあります。母として、妻として、市長として日々過ごす中で、やはりここでも重要なのはバランスをどうとるかでしょうか。

最近子どもたちも大きくなつてきて以前よりも大変です。私の仕事のこと、今日誰と会ったか、どんな問題があるかなど知りたがるのです。いつも「なんで?なんで?なんで?」と聞いてきます。しかしもちろん何の問題もありません。私は素晴らしい夫に恵まれました。いつもお互いに支え合っています。仕事と家庭の両立で大事なのはバランスだと思います。私たちはこれを本当に重要だと考え、仕事の時間と家族との時間をきちんと区別し、どちらも大切にしています。そうすることでうまく両立できていると思います。

12

次の市長選も来年と近づいていきます。振り返ったとき、フィンドレー市長として何か困難はありましたか。

私が市長になった当初、フィンドレー市には前市長から引き継いだ約四百万ドル(四億円)の負債がありました。この財政赤字の原因にはまたしてもリーダーシップの問題があったと思います。この負債への対処のため一昨年からは昨年にかけて、私は多くの難しい決断を迫られました。毎日夜遅くまで仕事をしなければなりませんでした。ですから、最初の二年間は困難も多かったのですが、市民のために共に働く素晴らしい同僚に恵まれ、最近六か月ほどは財政も上向いてきたと思います。これまで市長として多くの課題に取り組み、よい成果をあげてきたと思いますし、これからもそうあり続けたいです。

13

それでは、ミハリック市長の今の夢は何ですか。

私の夢はこれからも長い間フィンドレー市長として最高の喜びを感じ続け

ることです。だからこそ、フィンドレー

を最高の場所にするのを私の目標としたのです。市民がどこか他の場所に行ってしまうようになったら、そのときは市長として身を引くときだと思います。しかし人々がここに居続けたいと思う限り私は嬉しいです。私はフィンドレーにおいて、この場所をよくできればそれで幸せです。

14

最後に、今回のインタビュの主な対象である日本の高校生を含め、未来の世代に向けてメッセージをお願いします。

今学べるだけ学んでください。常に新しい、面白いことに心を開いてください。好機はきつと訪れます。そして世界は皆さんの目の前に広がるでしょう。自信に満ちた、寛容な人であれば、成し遂げられないことはないと思います。ときには恐ろしく感じることもあるでしょうが、チャンスは無限にあるはずですよ。日本にだって必ずあるでしょう。自分の「星」を掴んで下さい。鍛錬を重ね、強い意志を持って必ず成し遂げられます。どこへ行っても、努力すれば大丈夫で



す。

### 三、編集後記

〜曾根友也〜

何か形に残るもので埼玉県とオハイオ州の親善に貢献したい。特に私たちと同じ若い世代に留学の意義を伝え、関心を持ってほしい。こうした想いでこの企画を立ち上げました。本レポートは、三方へのインタビュー依頼と日程調整、事前調査、質問作成、インタビュー、録音データの文字起こし、要点の確定、翻訳、編集という過程を経て完成しました。授業やその他様々な活動の合間を縫って作成し、三ヶ月程かかりました。大学や市、三方についてのより深い理解はもちろん、英語でのインタビューの仕方学ぶことができました。

全てのインタビューを終えた今、強く感じることは、留学が本当に価値あるものだという事です。三方全員がその価値を認め、必要性を強調していたように思います。私は異文化交流を通じて人々の世界観は大きく変わると思っています。昨今グローバル化が叫ばれ、そうした社会において国際交流・理解は不可欠だということを頻繁に耳にします。無論、これを否定するつもりはありませんが、私が素直にまず思うのはもつと単純な

ことです。それは、世界にいる様々な面白い、素敵な人々に会わないのもつたいたいということです。人種や国籍、言語等が異なる人々に出会い、様々な考えに触れ、何かを感じ、学ぶことは自分の価値観や考え方を変え、人生を豊かにすると思えます。自分だけでは気付かなかったことや見えなかったことを知り、成長できると思うのです。

フィンドレー大学や市を牽引している三方によって語られた言葉を通じて、また私たちのインタビューへの挑戦そのものによつて何かを感じていただけたら幸いです。埼玉県とオハイオ州を繋ぐ「草の根親善大使」として、少しでもその関係の向上に貢献できたことを願います。

〜河上直子〜

埼玉親善大使の曾根君によつて企画されたこのインタビューは、私たちが受けている奨学金制度や留学そのものについて、両県の高校生への情報発信を目的としました。しかし、私たちにはインタビューについてのノウハウが全く無く、実際のインタビューを行うまでや、その後の編集作業の一つ一つの過程を模索しながらの三ヶ月でし

た。途中、挫折しそうになることもありましたが、「インターネットで検索可能な情報を掲載するのではなく、私たちにしかできない記事を作成しよう」という思いの基、よりよい記事を作成するために数え切れない程のミーティングを重ね、こうして形にすることができました。

インタビューで最も印象的だったのが、フェル学長の「差別問題は国家間ではなく個人間の問題として捉えられるべきである」という言葉です。この言葉は、人種差別をはじめとする、様々な差別や偏見などの根絶にも多くの共通性を持つものだと思います。実際、私が留学以前抱いていた特定の国や地域に対する固定観念が、この十ヶ月間で彼らと深い友人関係を築く過程でなくなつていったことを思うと、まさにこの言葉を身をもつて体験できたように思います。個人では解決が難しく思える問題も、まずは些細な一歩から始まるものなのだと思ってきました。

留学は決して言語的なメリットだけではありません。様々な価値観に触れ、今まで気付かなかったものの方・考え方を知ること、広い視野を

持つことができるようになると思います。この企画は私たちができる国際貢献へのささやかな一歩ではあります。しかし、点が線になって面になるように、両県の高校生が留学やこの奨学金制度への関心を深めるきっかけとなり、小さな交流が大きな力に繋がればと思います。

